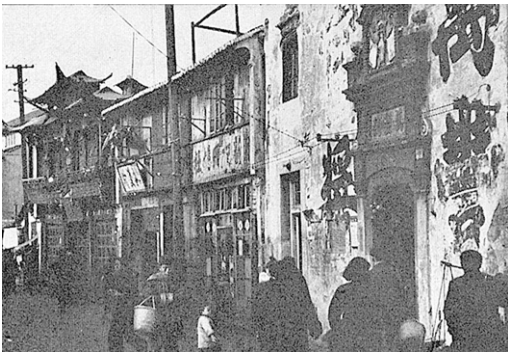


歴史の証言としての言語景観

— 恐怖時代の残像 —

彭 国躍

六十三年前の上海の街角を映した一枚の古い写真映像を入手した。その写真の画面右側には、醤油、酒、塩、味噌などを販売する小売店が映っている。その店頭の前には「萬豊官醬」という縦書きの広告文字が大きく書かれている。「萬豊」は固有名で、「官醬」は政府公認の「醤油店」（酒屋）という意味である。建築様式と店舗形態から、おそらく清末頃に創業した老舗ではないかと推測される。



名取洋之助撮影、『江南』岩波書店1957年58頁

この写真には一つの謎がある。風雨にさらされた広告の文字はかなり風化しているが、よく見ると、四文字の中で上層の「官」だけが際立って色あせていることが分かる。下段の「豊」と「醬」の色が通行人などとの接触ですり減ったのは理解できるが、目測三メートルぐらいの高さにあるこの文字だけがひどく退色しているのは、一体なぜなのだろう。

写真が撮影されたのは1957年、つまり社会主義革命後社会制度が変わって7年目の頃であった。1950年に入ってから、たび重なる粛清運動が繰り返されていた。矛先は旧政権の協力者と新政権の反対者であった。その中には、かつての土地所有者、会社経営者、役人、知識人などが多

く含まれていた。一旦何らかの理由で「地主」「資本家」「反革命」というレッテルを張られ巻き込まれたら、処刑されたり、刑務所に入れられたり、家や財産を没収されたりしていたことは多くの被害者家族の記憶に刻まれ、歴史文獻に記録されている。

「官」は、もともと官僚、役所の意味で、「官～」の組み合わせでは「政府公認の～」という意味で造語を作ることができる。1949年以前には、信用が高いというプラスのニュアンスを持っていたため、習慣上「官醬」は老舗の酒屋の名称としてよく使われていた。しかし、時代が変わると、価値観が逆転し、「官」は社会主義中国ではマイナスの意味に変わり、罪深い旧政府を意味するようになり、かつてのキャッチコピーも仇となり、旧政権の協力者というニュアンスを帯びるようになってしまった。

この写真に映った「官」という文字だけがひどく退色していた謎について、外に合理的な解釈がもしあれば、それをぜひ知りたいが、私は、この写真を見るたびに、文化大革命（1966～76年）中の周りの大人たちの慄く姿を思い出す。「大革命」以前の十五年間にはたくさんの「小革命」が続いていた。1957年はちょうどその中の一つ「反右派」運動が始まる年であった。その頃のある日、酒屋の店主が人目につかない真夜中に、梯子に登って必死に「官」をかき消そうとしていた姿が脳裏に浮かぶ。写真の映像はその行為が残した痕跡だと解釈すると、謎がすんなり解けてくる。

このお店のその後の運命はいまの私には知るよしもない。しかし、不安と恐怖に怯えながら必死にこの一字を消そうとする店主の切羽詰まった思いは、この写真の奥から半世紀後の今の私たちに訴え続けているような気がしてならない。